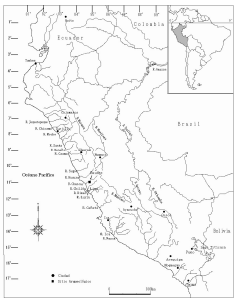
発表タイトル	ペルー中央海岸サウメ遺跡発掘調査の出土資料分析
発表者所属名	文化科学研究科比較文化学専攻
発表者氏名	浅見恵理

1. はじめに

サウメ遺跡はペルー中央海岸北部チャンカイ川中流域左岸に所在し、チャンカイ文化（紀元後 1,000－1,470 年）に属する。遺跡は基壇、部屋状構造物、広場で構成され、河岸段丘上に広がっている。

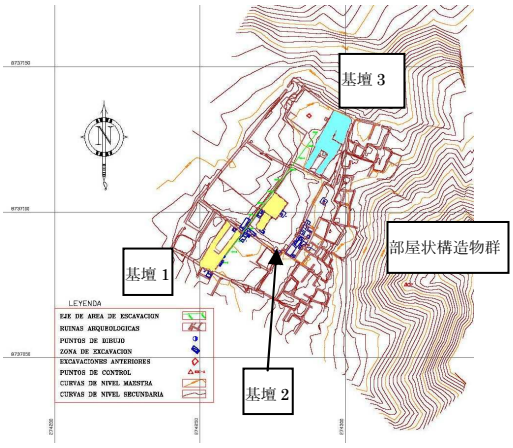
本調査の目的は、2009 年に実施した発掘調査で出土した資料の分析である。対象は主に土器と染織品である。



2. 分析調査

土器片の総数は約 8,000 点であり、まず接合作業から開始した。土器片の形状や内外面の調整技法、胎土等から判断し、類似する土器片を探して形を復元する作業である。

染織品については破片が約 200 点、完形品が 1 点である。まずそれらの清掃作業を行い、その後、染織技術の観察を行った。



3. 調査成果

【土器】

土器の器種は、壺、皿、甕、椀、人物象形土器（クチミルコ）に分かれる。文様は主に 2 種類みられ、白地黒彩とラウリ・インプレッソがある。

白地黒彩様式はチャンカイ谷を中心に中央海岸北部に普遍的に見られる様式である。

一方、ラウリ・インプレッソはチャンカイ谷の北に位置するワウラ谷の上流域とチャンカイ谷に限定される様式である。両者はほぼ同時期に見られるが、その相関関係については不明である。器種構成はほぼ白地黒彩様式と同様である。

土器片の中にはいくつか異なる特徴を持つものもある。例えば、同時期の北部海岸に広まっていたチムー様式、中央海岸南部のイチマ様式、またチャンカイ文化の後の時期となる後期ホライズンに属すると思われるものが少数ながら存在する。

【染織品】

染織品に関しては、糸紡ぎの際に捨てる綿のくずが部屋状構造物から出土しており、さらに織物用道具も出土していることから、本遺跡で織物作業を行っていたと推測される。また、部屋状構造物の床下からは、完形の織物も出土していることが明らかとなった。技術的な観点では、中央海岸と北海岸それぞれに特有の技法がみられる。

4. 結論

チャンカイ文化の墓地からは副葬品として多量の染織品や土器が出土するが、製作地は不明のままであった。今回の調査で、部屋状構造物という、いわば居住空間または作業場等の生活の場から織物製作の痕跡が確認できたのは大きな成果であった。今後は、土器製作や遺跡における活動の解明を視野に入れて、詳細な分析を進める予定である。